

| | |
|------------------|---|
| Title | 『資本論』第3部第5篇(上)：その成立と現代 |
| Sub Title | The fifth part of the third volume of Marx' capital : its formation and relation to the modern capitalism |
| Author | 飯田, 裕康 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1983 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.76, No.3 (1983. 8) ,p.437(63)- 456(82) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19830801-0063 |
| Abstract | |
| Notes | 特集：カール・マルクス：没後103年 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19830801-0063 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『資本論』第3部第5篇(上)*

——その成立と現代——

飯田裕康

序

F・エンゲルスが、マルクスの『資本論』第3部を編集・刊行したのは1894年であった。マルクスが、第3部のための最初の草稿を執筆してから約30年の歳月が経過していた。今日、エンゲルス編集の第3部が刊行され約90年が過ぎた。小稿は、現段階の資本主義下の金融構造の解明に、第3部が——直接的とは言わぬまでも——なお一定の役割をはたしうるという立場から、第3部、とりわけ第5篇の論理構造をあきらかにすることを目標としている。このような作業は、従来いく度か試みられてはいるが、MEGA²の刊行が、マルクスのオリジナル草稿に接近する広い機会を提供しつつある現状をふまえて、上記作業がなされるであろう。今日刻々と変化しつつある金融市場を分析的に問題とするためにも、このことは不可欠の作業だと言ってよいであろう。

『資本論』第3部(現行版)は、剰余価値の利潤への転化を契機に、資本主義的生産の総過程、生産と流通との統一を、より現実的な表象に接近したところにとらえ、それらが総じて、資本主義的物象性の展開局面であることを明らかにし、同時に、資本主義的表象のまさしくブルジョア的性格を、いわゆる三位一体的範式と、その批判とによって示そうとしたといつてよいであろう。この課題は、第3部全体を通じて果たされるものであるとの観点から、エンゲルスによる編集がなされたといつてよいであろうが、そこには単純にそのように判断しえないいくつかの理論的な問題が存在することも、近年あきらかにされつつある⁽¹⁾。とりわけ、第3部が競争規定を契機として、第1部、第2部とは異なり、総合的な意味を持つことが強調される余り、現行第2部と第3部との論理的な連関等についての疑点が提示されるにいたった。このことは競争規定から分配論的諸次元を展開す

注(*) 小稿は1982年9～10月、慶應義塾とソ連科学アカデミー東洋学研究所との交換協定にもとづいて、モスクワに滞在し、ソ連共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所(IML)において調査・研究をおこなった成果の一部である。そのさい、IMLのA. マルイシュ教授、L. ミシュケウヴィッチ氏、A. チェブレンコ氏から懇切なるご教示を得た。とりわけチェブレンコ氏との討論は、小稿作成に当って、大変参考になった。これらの諸氏に深く感謝する。また小稿は、1981年度、慶應義塾学事振興資金の援助を得た研究成果の一部でもある。

(1) 『資本論』第3部の編集上の問題については、さし当り大村泉「生産価格と『資本論』第三部の基本論理(上,中,下)」「経済」1983年3,4,5月号、および大谷禎之介「『資本論』第3部第1稿について——オリジナルの調査にもとづいて——」「経済志林」50巻2号、1982を参照されたい。

ると解する見地に対しても、一定の疑問を提示せずにはおかないであろう。要は、資本主義的生産の総過程が、論理的に何を基本的契機として組み立てられているのか、その基本的契機の検出をまずおこなわねばならないということであろう。その上で、商品経済の全体的な、したがって特殊、歴史的形態としての資本主義社会のもつ、独自の物象化構造が示されることになると言わねばならない⁽²⁾であろう。小稿は、このような観点から、当面、エンゲルスによって『資本論』編集上最も困難であったとされる第3部第5篇(マルクスの草稿では第5章)の成立、構成上の問題点を探ってみようとするものである。小稿は、もとより近年のマルクスの草稿のオリジナル調査にもとづいた精細な論究に比定されるものではなく、あくまで論理構造に重心を置いて検討を加えようとするものである。そのさい、ここでわれわれが特に留意したい論点は以下の事柄である。

第1に、まず注意すべきことは、現行版第3部第5篇の基礎となった「第3部主要草稿」(あるいは「原初稿」とも「第1草稿」とも呼ばれている)が、現行版『資本論』第2部の「第1稿」(1864,執筆)と、その執筆時期においても、理論上も、密接な関連をもっていること。第2に、マルクスが、いわゆる「資本一般」の領域外に留保した「信用」の論述は、現行第3部第5篇においても、従来の多くの論議にもかかわらず、内容的に——すなわち「プラン」の対象領域という一面形式的論議にかかわるのではなく——限定されたものであること。第3に、主要草稿以降、現行版にかけて、いづれにせよ、信用論の基礎範疇が「利子生み資本」(Das zinstragende Kapital)とされることは、直接、三位一体的範式と結び付くものではなく、資本主義的信用諸関係の基本性格を、諸資本の競争との関連において把握する範疇であること、そしてそのかぎり第3部が直接前提とする第2部(資本の流過程)との論理的連関によって措定される問題・利潤と対照的な範疇であること。ここから *monied capital* の貨幣(あるいは「通貨」Currency)に対する、また貨幣資本 *Geldkapital* に対する区別問題が提起される。したがって、第4に、『経済学批判要綱』において展開された信用の基本規定は、現行版第3部第5篇においては、上記の視角から再構成されねばならないこと。第5に、かかる視角は、*monied capital* の自立的運動論理の解明によって、現行資本主義下の金融諸現象の顕著な変容の理解のための基礎視座の設定に有効であること。以上である。

1. 信用論形成史の問題

[1] 1850年代のマルクスは、経済恐慌の襲来による革命的危機の醸成に一定の期待を抱きなが

注(2) すでにD. ローゼンベルグは、その『資本論註解』において、マルクスの『資本論』全体を物神崇拜論の展開として把握するところみをなしている。とりわけ、第3部の論理展開は物神性の展開に従ってなされるとしている。小稿での物象化の論理は、このような物神崇拜論と直ちに同列のものではない。近代ブルジョア社会を構成する人間が、貨幣や資本に対して抱く倒錯した感情としてではなく、そのような主体的倒錯の生じる構造そのものを解明するものとして物象化という概念を用いる。

らも、40年代全般を通じて自らのものとした彼独自の市民社会把握にもとづく近代ブルジョア社会批判の方向に反省を加えつつ、市民社会認識そのものの深化を意図していた。それには、いくつかの特徴があげられるであろうが、とりわけ以下の諸点に注意しておく必要があるであろう。まず第1に指摘されるべきは、『経済学・哲学草稿』（Die ökonomisch-philosophische Manuskripte）を中心とした市民社会認識の経済的側面、とりわけ労働と貨幣との一面において対立的でかつ、他面において依存的な関係に、近代の資本の独自の歴史的な社会関係を包括的にとらえる立場から、とらえられているもの自体の「解剖」をとおして総体の独自の運動の構造を解明するという、ある種の方向転換がなされた。1847年の『賃労働と資本』、『賃金・価格および利潤』や、『哲学の貧困』は、このような転換を具体的に表明するものである。それらにおいては、古典経済学や「国民経済学」のごとくに貨幣や物財のような素材の観点から資本をみるのではなく、資本を生産的資本として、範疇として更めて措定する基本的立場が確認されるだけでなく、生産的資本の運動部面から「生産諸関係」の概念が展開されるにいたっていることを併せて述べておかねばならない。このような方向は、ブルードン批判に対してきわめて大きな貢献をはたしたのであって、いわゆる経済学批判が、方法批判であることをも明示した。

これに対して50年代は、前述の成果をいっそう十全なものにするために、資本を再生産の問題として把握することで、一面においてマルクスの歴史理論そのものの展開を計るとともに、他面、流通の問題を新たに視野のなかに組み入れる必要性をも感じ取るにいたっているのである。

第2には、このことと一面密接にかかわりつつも、近代ブルジョア社会が「世界市場としてのブルジョア社会」としても、把握されるにいたっていることである。すなわち、50年代の資本把握の独自の意義としての流通問題は、世界市場的連関の媒介的契機とされることになった。また、このことと並んで、マルクスは、「世界市場」論との対抗において「資本一般」論をも提起し、展開しえたのである。

以上のような2つの論点のうち、われわれがここでとくに注目しなければならないことは、資本と流通との関連にかんする第1の論点である。1850年代前半におけるマルクスの努力が、1847、48年恐慌を一つの軸として転回したイギリスにおける通貨情勢、およびそれをめぐる諸成果の撰取と検討に注がれていることによっても、このことはいっそう明白なものとなる。マルクス信用論の個有の問題性も、このようなマルクス自身の転回のなかから、まず立ち現われてくるといつてよいであろう。1850年代マルクスを特徴づけるマルクスの貨幣・信用論研究の全貌は必ずしもあきらかではないが、それらの研究の成果の一つとみなすことのできる1851年の手稿『省察』（Reflection）を通じて、ある程度理解し得られるであろう。そこでは、信用は、まさに信用と資本の再生産との関連のなかで、さらに、（貸付可能な）貨幣資本の独自性の究明のなかに明確に把握されていたといつてよいであろう。ただここでは、マルクス自身、スミス=トックによる流通二分論を理論的に前

提していることを併せ指摘しておかねばならない。⁽³⁾

さらに、いまひとつ付け加えるならば、1850年代へのマルクス自身の思想的営為において占めるブルードンの影響が看過されてはならないであろう。『哲学の貧困(1847年)』はブルードンに対する決定的批判ではあったが、下って1857—58年の『経済学批判要綱』における労働貨幣論=時間紙幣論批判や、無償信用論批判へと結実する過程として、50年代初頭をみるならば、ブルードンの『19世紀における革命の一般的理念』のマルクス(およびエンゲルス)への影響もまた無視されてはならない。⁽⁴⁾『省察』のマルクスが、信用と再生産という基本視角を措定したのは、対極にブルードンによる信用把握があつてのことであつたと考えてよいであろう。ここでは、貨幣あるいは単純流通ではなく、資本それ自体とのかかわりにおいて、信用を捉えること、すなわち独自の流通圏をもつ貸付可能な貨幣資本を析出することによって、ブルードンへの批判的対処が為されたといつてよいであろう。⁽⁵⁾それは、古典派信用論に依拠したブルードン批判だといえよう。

[2] 1850年代初頭において、マルクスが通貨論争に関連するパンフレットや、諸著作を広範囲に渉猟し、それらにかんして抜粋ノートを残していることはすでに明らかにされている。これらの⁽⁶⁾lectureを貫くマルクスの問題意識は何であつたのか、また、それらは、1857—8年の『要綱』にどのような影響を及ぼしたのであろうか。まずもって注意されねばならないことは、通貨問題にかんするマルクスの読書が、直接的な形で『要綱』に引き継がれているという証拠をほとんど見出しえないということである。それどころか、『要綱』はそれらに対してまったく別の次元から組み立てられているといった方が、はるかに『要綱』の現実の姿に近いということである。周知のとおり『要綱』は、「序説」に明示されているごとく、三大階級によって構成されるブルジョア社会の内的編成を叙述することにその基本的役割を課している。資本家・労働者・土地所有者の三大階級のよつて立つ物質的基盤を一つの総体として叙述することがそこでの課題であつた。そのさいマルクスはまず、古典経済学やその俗流的流派が常套とする方法を真っ向から批判し、生産の特殊歴史的編成のみを対象とする方法を明示した。そして、その方法の具体的実施のための、基本的枠組みとして「資本一般」(Das Kapital im Allgemeine)を措定した。『要綱』は、①貨幣にかんする章、②資本の生産過程、③資本の流過程、そして④果実を生むものとして資本という四つの部分から

注(3) Karl Marx, Reflection (1851) Marx Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung Band 10, 1977. (以下MEGA² I/10のように略称 SS. 503—510)は、1850年の9月から1853年8月にかけてマルクス自身によって作成された24冊の抜粋ノートの第VII冊にある。MEGA²の編集者によれば、1851年2月末から3月はじめにかけて執筆された。

(4) F. Schrader, Restauration und Revolution, 1980, S. 91f.

(5) より詳細には拙稿「貨幣資本蓄積論の構成」「金融経済」189号, 1981.

(6) さし当り, Schrader, *ibid.*, Rubel, M. Les cahiers de lecture de Karl Marx, in: International Review of Social History, Vol. II, 1957. とくに405ページ以下, 八柳良次郎「マルクス〈ロンドン抜粋ノート〉における貨幣・信用論」「経済学」44巻1号, 1983年等を参照。

構成されていることは言うまでもない。とくに注意すべきことは、この構成が、現行『資本論』の三部構成に単純に重ね合わされてはならないという点である。最も大きな差異は、端的に言って『要綱』の構成は——したがって叙述の基軸的論理は——、貨幣に始まって貨幣に終わるということである。まず第1に指摘されるべきことは、『要綱』の全論理が、貨幣を下敷きとした物象化論理の展開としてなされているということである。マルクスが「序説」(Einleitung)を生産一般から始めて、その立場に固執することの不適性を自ら明白にしたことは、『要綱』の叙述それ自体による批判の貫徹のための方法、すなわち近代ブルジョア社会の表象でありかつ根底をなす貨幣の多面的な分析をもって始まるという方法に連なるのである。⁽⁷⁾学説史的に言えば、マルクスはここではじめて「流通」の問題を正しく措定し得たのである。

こうした方法をうけて、資本の生産過程および資本の流通過程の分析は統一的な過程の両側面としてなされるとはいえ、この場合、「資本はつぎのことを前提としている。すなわち、(1)生産過程一般、これはあらゆる社会状態に固有な、したがって歴史的——人間的といってもよい——性格をもたないもの。(2)流通、これはそのいずれの契機から見ても、さらにはまたその総体から見ればますます、それ自体すでに一定の歴史的産物である。(3)両者の一定の統一としての資本」と述べられているように、流通の展開が、資本に歴史的な性格を付与する基本的契機としていることは、きわめて示唆に富むものだとしなければならない。まずなによりも、資本が生成するもの、ないしは生成しつつあるものとして把握される『要綱』の論理のなかにあつて、貨幣の資本化の論理が、資本の歴史的な措定にとって根底的なものとして示されている。ここでのマルクスは、生産と流通との統一を基底とした独自の生産過程の編成に、すなわち、貨幣が生産それ自体をつかむ方向性のなかで資本の生成を問題としていることに止目すべきであろう。ここには、『要綱』の以下の展開に規定的に作用する、単純流通 $W-G-W$ を基底として、それに対立する $G-W-G$ を介して、そのうえに資本流通 $G-W-G'$ が重層するという流通の構造が把握されている。すなわち、資本の流通過程の分析は、上述の統一を基本的契機とした分析であり、したがって資本の再生産過程の流通視角からの分析だということである。『要綱』における信用の措定は、このような再生産把握に連なっている。

他方、資本の再生産過程を措定する資本の生成にとって、貨幣の資本として性格の明確な把握が不可欠である。これについてマルクスは、ブルードン(およびバステア)への批判的見地から、つぎのように述べる。

「資本は、貸出されて利子を生むのではなく、他のすべての商品と同様に商品としてその等価物と引換えに販売されるべきだというブルードン君の提起した要求は、要するに交換価値は単純な

注(7) 『要綱』貨幣章については、内田弘『《経済学批判要綱》の研究』1983年を参照。また叙述による批判については E. Large, *Das Prinzip Arbeit*, 1981 を参照。

(8) Marx, K, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie [Rohentwurf] 1857-8, 1953. S. 226.* 高木幸二郎監訳, 第2分冊, 240-1ページ。以下 Gr, S. 226, @ 240-1ページのごとく引用。

交換価値のままとどまるべきであって、資本となつてはならないという要求、資本としての資本は存在してはならないという要求にすぎない。……公正と正義への配慮といったことにかんするおしゃべりは、単純な交換に照応した所有関係ないし法律関係を、より高度な交換価値の段階の所有関係および法律関係の基準として設定しようというだけのことである。したがって、バスティアの方は、ひたすら資本になろうとする単純流通の諸契機を、無意識のうちに強調するのである。⁽⁹⁾——商品としての資本それ自体は、資本としての貨幣、あるいは貨幣としての資本である。」

この引用文からもあきらかなように、マルクスはここで、monied capital を否定して単純流通の表象に資本の高度な関係を押し込めてしまおうとするバスティアやブルードンの愚を批判するとともに、商品としての資本が貨幣資本であることを確認し、単純流通がむしろ必然的に資本(monied capital)に展開しなければならないことをあきらかにしたのである。このことは「果実生み資本」の分析によって果たされることになる。すなわち、ブルードン(やバスティア)の視点を逆に読むことによって、そこに資本の完成された姿態を展望することが意図されている。

『要綱』のマルクスは、このようにすでに生産過程の分析に先立って、貨幣資本の独自の運動契機をあきらかにし、生産にとっての流通の独自の意義を指摘することができた。このような分析は、かくて「資本の流過程」論に引き継がれてゆき、信用の措定をもたらししたのである。⁽¹¹⁾

『要綱』段階のマルクスの信用論は、なによりも、われわれが再三指摘してきたように、いわゆる「信用の基本規定」をつうじて展開される。そこでは、資本の再生産過程の剰余価値の生産にとっての役割、いわば価値の実現部面との関連において、流通時間のない流通の措定として必然的に展開されるとしている。⁽¹³⁾すでにアダム・スミスが『国富論』第2篇において、流過程における貨幣の節約論を、重商主義批判の観点から資本蓄積の積極的側面として論じていたのであるが、マルクスの基本規定は、それに対してどのような独自の意義を担うものであろうか。

まずここで注目すべきことは、流通を生産の中断として、同時にまた生産を流通の中断としてとらえるマルクスの視点であろう。生産と流通とは、たんに統一体としてではなく、対立的要因として把握されているのである。第2には、さきの引用中にも見えるように、『要綱』独自の貨幣把握に立脚して、流通を積極的に貨幣的契機としてみている点である。第3には、こうした理解のうえに、⁽¹⁴⁾「資本所有の量的制限打破」の観点が展開されているのである。

注(9) Gr. S. 225, ② 239—40ページ。

(10) 『要綱』の果実生み資本は、資本の疎外形態としての資本—利潤関係と、資本の物象化関係としての資本—利子とが、ともに論じられている。前者は、回転論の延長線上にあるとしてよいであろうが、後者は、単純流通論との対応として、貨幣章に連接する課題を有している。

(11) なお、『要綱』の時間の経済論との関連も無視されてはならない。

(12) これについては、拙著『信用論と擬制資本』1971年を参照されたい。

(13) この点とくに強調したものとして、深町郁弥『所有と信用』1971年がある。

(14) Gr. S. 552, ③ 608ページ。

このようなマルクスの理解は、貨幣流通を所与とする古典経済学の貨幣観とはまったく異なって、ある面ではスミスを継承して流通部面こそ貨幣が「創出」される場であると考えていることであろう。流通とは当然のことながら、資本の流通過程である。資本の流通過程のみが、唯一、貨幣＝資本の創出に連なることをあきらかにすることは、流通過程が資本の回転の如何にとって規定的原因の一つであることの理解にもつながっている。しかるに、このように、流通時間それ自体が貨幣化されることと、上述の第3の「量的制限の打破」なる規定とはいかに結びつくのであろうか。『要綱』は、このことと関連して大きな問題を信用論の展開のうえに残している。それは、『要綱』においては「信用の基本規定」と、果実を生むものとしての資本、完成形態における資本＝貨幣資本とを論理的に結びつける環が示されていない、ということである。この原因は、二つの方向から考えることができよう。

第1に、信用を再生産過程に立脚して資本の信用制度ないし信用としての資本としてとらえる視角を明確にし、さらには流通時間の貨幣化という新たな問題をこれに結びつけようとしているのであるが、再生産過程における貨幣の還流形態に即した形態規定が明瞭ではないことをあげなければならないであろう。第2には、『要綱』における貨幣論の展開が貨幣としての貨幣から直ちに資本として貨幣に移行しているため、再生産過程における貨幣といわゆる *monied capital* との区別がなされていない。その区別を前提に、果実を生むものとしての資本＝「利子生み資本」⁽¹⁵⁾が把握されていない。第1の点は、ある意味では、『要綱』が「資本一般」を枠組みとして措定したことと関連している。すなわち、再生産過程から遊離する貨幣について、必然的に措定されるべき資本と資本との関係の契機を導入することができなかつたのである。

[3]『要綱』における信用の措定は、信用論の展開にとって大きな問題をのこした。一つには、ブルードン（ヤバステア）が単純流通に資本関係を押し込め、問題そのものを倭小化する傾向に批判的見地を明らかにしつつも、その立場との直接的対決の中でのみ「果実を生むものとしての資本」を把握しえなかつた、その前提それ自体を検討し、生産過程と流通過程の統一としての再生産過程と、単純流通の関係を問い直しつつ、そこから新たに信用論への契機を見出すことであった。いまひとつは、資本の流通過程を貨幣（資本）の側からとらえ直すことであった。これらの課題は、1860年代に入って「資本一般」の第3章のための準備作業を経て、「1861—63年草稿」（「23冊のノート」）において達成されてゆくことになる。⁽¹⁶⁾ここで興味深いことは、『要綱』のマルクスがスミスの信用論に連接する側面を残していたことと対比して、ここではリカードの信用の役割にかんする以下の指摘がより大きな意味をもって現われている。

注(15) 前注(10)を見よ。

(16) MEGA² II/3.2~3.6, 1981~1982.

「誰れでも、資本を自分の好むところに使用することが自由であるかぎり、当然その資本のためにもっとも有利な用途を探し求めるであろう。もしも自分の資本を移すことによって15パーセントの利潤を取得することができるならば、彼は当然10パーセントの利潤には満足しないであろう。より不利な業務を捨てて、より有利なものに向かおうとする、すべての資本使用者側のこの不断の願望は、彼らすべての利潤率を均等化しようとする、あるいは当事者間の評価のうえで、一方が他方以上にもっているかもしれない、もしくはもっているように思われるかもしれない、なんらかの利点を、補償するに足るような割合に利潤を定めようとする、強い傾向をもっている。この変化がもたらされる諸段階をたどることは、おそらく非常に困難であろう。その変化は、多分、一製造業者が彼の業務をまったく変えてしまうことによってではなくて、ただその業務に彼が投じている資本の分量を減らすことによってもたらされるであろう。すべての富んだ国には、いわゆる貨幣資産家階級 (monied class) なるものを形成している相当多数の人々が存在する。これらの人々はいずれの事業にも従事しないで、彼らの貨幣の利子で生活しているが、その貨幣は手形割引かあるいは社会の勤勉な部分への貸付に使用されている。銀行業者もまた大資本を同じ目的に使用する。そのように使用される資本は多額の流動資本を形成して、割合の大小はあるが、一国のあらゆる異なった事業によって使用される。どんなに富んでいても、自分の業務を自己資金のみが許す範囲に限定するような製造業者は、おそらく存在しないであろう。彼は、彼の商品にたいする需要の活発度にしたがって増減する、この活動資本の若干部分をつねにもっている。⁽¹⁷⁾」
(傍点引用者)

リカードは、『経済学および課税の原理』第4章「自然価格と市場価格」で、この一節を書いている。ここでは、利潤率の均等化をもたらず資本の移動と、その移動が信用制度(銀行業者)によって媒介されること、とりわけ、銀行業者の手中にある貨幣が割引や貸付によってこの役割を具体的に遂行することなどがあきらかにされている。リカードがここで想定している事態は、諸個別資本家間での競争以外のなにものでもない。したがって競争とそれと密接に関連する信用とが統一的に把握され、信用の固有の機能が、スミスのそれとは異なった次元においてあきらかにされている。1861—63年草稿段階のマルクスは、それまでも堅持してきた貨幣資本観を、ここで改めて、競争との関係においてとらえ直す。それは基本的には上のリカードの考え方に通ずるものであったといえてよいであろう。このことは、『要綱』においてたんに果実を生むものとしての資本とされていたものに、新たな内容規定を与えることを可能にすることとなるであろう。また、他面、1861—63年草稿は、『要綱』の信用の基本規定の展開に対しても一定の方向を示唆する成果を含むものであった。それは、資本の流通過程⁽¹⁸⁾、とりわけ再生産過程の分析と、それに関連する貨幣還流問題の措⁽¹⁹⁾

注(17) Ricardo, D., Works and Collespondence ed. by P. Sraffa, Vol. 1, p.88—2, 堀経夫訳 104—5ページ。

(18) Чепуренко, А.Ю., Разраьотка К. Марксом Проблемы Кругооьорота капитала В Черно-

定である。このように、『要綱』における信用論の問題は、いずれの側面についても、ここでいっ
 そうの展開がなされることとなるのであるが、それは「資本一般」をもはや厳格には保持しえない
 体のものとしてであった。

1861—63年草稿を構成する23冊のノートのうち、ノートVIからノートXV、およびノートXVIIIに
 またがる歴大な草稿「剰余価値に関する諸理論」は、この時期のマルクスの経済学批判体系の基本
 的方向を示すものとして、すでに度々指摘されているところである。この23冊のノート自体は、
 1859年のマルクスのプランに従って、「資本」にかんする第3章の展開として準備されたものであ
 ることも周知の知見に属する。ここで、その成立の経緯については論じえないが、その一般的特徴
 だけを指摘しておけば、つぎのようになるであろう。この23冊のノート全体は、ほぼ現行『資本論』
 全三部にわたる内容をカバーしているといつてよいであろうが、とりわけ、そこにおいて重要な問
 題だと考えられることは、「資本の流通過程」にかんするマルクスの展開が、他の諸分野と、まさ
 に有機的に連関させられつなされたということである。無論、現行『資本論』第2部の内容すべ
 てが、ここに提示されたということではなく、マルクスの分析がほぼ例外なく、流通過程論の方向
 を目指していたということである。また、61—63年草稿の内容編成上、もっとも不明確なものが、
 資本の流通過程にかんする論議であつて、展開は、資本の生産過程論、資本制生産の総過程論に付
 随して与えられるにとどまるのであるが、この時期に接続して、『資本論』第2部第1稿が作成さ
 れて、「資本の流通過程」への骨格が提示されていることからして、61—63年草稿での展開を軽視
 するわけにはゆかないであろう。しかも、資本の流通過程論全般の理論的展開の度合いが、『要綱』
 以降の信用論の展開とかなり連繫するものであることもここに指摘しておかねばならない。

[4] さきに引用したリカードの所説にたいして、マルクスはつぎのように論評する。

「彼(リカード……飯田)の功績は、彼が、資本のある部面から他の部面へのそのような移動を
 ——というよりはむしろその移動が遂行される運動の様式を——、より詳しく規定している点に
 ある。しかし、このことは、彼の時代に信用制度がスミスの時代よりも発達していたからにほか
 ならない。」⁽²¹⁾

部門間資本移動は、ここではリカードの価値・価格論、とりわけ需給の均衡にかんする論議に関
 連して取り上げられている。このような議論は、一方ではリカードによるいわゆる現象記述的方法
 の現われとして非難されながらも、部門間資本移動の信用による媒介を明白にしたことによって評

вых Вариантах “Капитала” 1981.

(19) コーガン, A., (中野雄策訳)「マルクスの1861—1863年草稿」『世界経済と国際関係』61号, 1983年。なお, J. Ju-
 ngnickel u. Ch. Sander, Zur Veröffentlichung des Manuskripts 1861—1863 (der zweite Entwurf des „Ka-
 pitals“) in der MEGA, in: Wirtschaftswissenschaft 31 (1983) 1. をも参照。

注(20) この点については、前掲大村論文を参照されたい。

(21) MEGA³ II/3.3, S. 857. 資本論草稿集編訳委員会訳『マルクス資本論草稿集』©1981年, 297ページ。

価されてきている。ではマルクス自身いかなる前提に立ってかかる評価をなしたのであろうか。それは、すでにリカードの当該する引用文にあるように、貨幣蓄蔵者や銀行家の手元における貨幣の、いわば *monied capital* の蓄積以外になかったであろう。この評価に続けてマルクスが、1861—63年草稿段階の特徴的信用把握ともいふべき以下のごとき指摘をなしていることが、併せて考慮されねばならない。

「したがって資本家階級全体の資本が、各部門の資本家たちの資本所有に比例してではなく、彼らの生産要求に比例して、各部門の使用に任せられるのは、信用によってなのである。——ところが一方、競争においては、個々の資本は互いに対立し独立なものとして現われるのである——。そしてこの信用は資本主義的生産の結果であるとともに条件でもあるのであって、これによって、⁽²²⁾ 諸資本の競争から信用としての資本へのみごとな移行が与えられるのである。」

ここでの信用の意義については、われわれはかつて取り上げて、いわゆる『剰余価値学説史』段階の信用論の達成として指摘したことがある。⁽²³⁾ いま敢えてこれを再説すると以下のようになる。

ここでは、信用は競争の相互自立的・対立的資本の契機によってではなく、資本は一つの全体として現われることがあきらかにされる。それだけでなく、このような信用の特性は、『要綱』においてあきらかにされた「資本所有の量的制限の打破」の方向からとらえられている。さらに信用が資本主義的生産の条件ともなることを明示することによって、流通時間のない流通ないし節約的契機に対して、これを相対化する方向が示された。このことが信用としての資本への移行のペースペクティブを与えるともされたのである。問題はこうした信用把握それ自体の転回がなにゆえ可能となったかである。一見するところ、『要綱』において定立された「信用の基本規定」すなわち信用と資本の再生産との関連にかんする原理的規定は、ここでは否定されてしまったかのごとくであるがはたしてそうであろうか。

資本の再生産過程とりわけ流通過程における貨幣の形態諸規定にかんして、『要綱』では、それを単純流通次元の流通手段規定をもってとらえられるか、貨幣としての貨幣として流通過程にとって対立的に把握するかのいずれかであった。このことは、前に指摘した『要綱』の基本構造からして当然の帰結であった。これに対して1861—63年草稿、とりわけ手稿「剰余価値にかんする諸理論」においては、改めて再生産過程における貨幣の問題が提起され、 $G-W-G$ の、貨幣の形式的還流と、それとは本質的に異なるそれ自体が再生産過程をなすところの還流とが明確に区別された。さらに、この後者においては、資本の流通と収入(所得)の流通とが区別され、 $G-W-G$ にたいする $G-W-G'$ の意義、すなわち資本の循環の意味が鮮明にされ、貨幣資本としての貨幣の把握が再生産の問題としてなされた。また、信用制度を前提とした「貨幣」の還流が、上述の還流とはま

注(22) a. a. O., S. 858. 前掲邦訳 298ページ。

(23) 前掲拙著、第2章を参照。

まったく異質な問題を成すことがあきらかにされ、貨幣と資本、貨幣資本と貸付可能貨幣資本との区別（二重の区別）への途が開かれたとあってよいであろう。さきのリカードへの関説による、階級全体の資本としての貸付資本の把握と、その部門間移動のための運動契機は、これらの点を前提にして論じられるにいたったものである。『要綱』における節約規定に立脚した信用の基本規定は、資本の再生産過程における貨幣資本と、その貸付可能貨幣資本への転成とによって、資本所有の量的制限打破の視角へと引き継がれていった。ここに流通時間の貨幣化のよりいっそう具体的展開をみることができるであろう。

〔5〕資本の流通過程、資本の再生産過程における貨幣の問題は、1861—63年草稿においてはさらに、ノートXVIIIにおける手稿「再生産過程における貨幣の還流運動」においていっそうの展開がなされる。ここでは、G（貨幣資本）がG'（より大きな貨幣）となって還流するのかという未解決問題への挑戦が再度なされている。この問題と関連して、マルクスは、貨幣と貨幣資本との区別にも言及し、トウクの流通二分論に一面では依りつつ、資本としての貨幣の流通形態を明確に示した。しかし、問題そのものは解決されたわけではなく、最終的には『資本論』第2部第2稿（1870）をまたねばならなかった。

ともかく、マルクスの信用論の展開にとって、再生産過程における貨幣の解明は、貨幣資本（monied capital）と貨幣との区別を鮮明にするうえで大きな役割をはたした。

このような観点から1861—63年草稿において注目されるのはノートXVの補録である。⁽²⁴⁾ ノート891ページから開始される〔収入とその諸源泉〕と題される手稿は、「資本主義的生産の諸関係を最も呪物的な形態で表わしている」ものとして、物象化論理の経済学的な展開の頂点をなすものである。「とはいえ、すべてこれらの形態のうちで最も完全な呪物は利子生み資本である。ここには資本の本源的出発点——貨幣——があり、そして、定式G—W—G'がその両極G—G'に短縮されている」としているように、ここでは貨幣であって同時に資本でありながらG—W—G'の運動を自らは迎らないものとして、利子生み資本がとらえられている。

利子生み資本を完成された資本としてとらえる立場は、さらに産業的諸資本の競争との対比における貨幣市場の特殊性の論究へと進み「一方の側に借り受ける資本家階級があり、他方の側には貸し付けるそれがある」というように、取引される商品の使用価値的差異性にかかわりのない純粋な需要と供給の対立があるだけであり、⁽²⁵⁾ 「貨幣資本（貨幣市場における資本）は、それが共同的要素として、その特殊な充用には無関心に、種々の部面のあいだに、資本家階級のあいだに、それぞれの特殊な部面の生産上の要求に応じて配分されるさいにとる姿を、現実にもっている。また貨幣資本は、

注（24）この補録については、前掲拙著、第2章を参照のこと。なお、拙論は、利子生み資本論と、「資本の流通過程」論の成熟との関係にはふれていない。この点不十分である。

（25）MEGA² II/3.4 S.1463, 『マルクス資本論草稿集』⑦470ページ。

「むしろ集中され組織されて、現実の生産とはまったく別の仕方、資本を代表する銀行家たちの管理〔として〕現われる。⁽²⁶⁾」供給側からみれば、社会的な貸付可能資本として現われるとして、いわば階級共同の資本の性格を持つにいたることをあきらかにしている。

ここで、マルクスが、一般の競争のなされる市場と比較しつつも、金融市場 **money market** の側から貨幣資本をとらえ、それが一面では貸付可能な貨幣資本であることを説く方法は、利子生み資本の内容をあきらかにするさいに注意されねばならないことであろう。すなわち、競争を前提に信用を説こうとする場合、貨幣市場が、『要綱』の基本規定の措定にとって代わるべき地位にあるということなのである。こうした論理を信用論の観点からいっそう明瞭に示すのは、マルクスのつぎのような指摘である。

「諸価値の費用価格への均等化は、ただ次のことによつてのみ行なわれる。すなわち、個別資本は階級の総資本の可除部分として機能し、他方、階級の総資本は生産上の必要に応じて種々の特殊な部面に配分される、ということによつてである。こういうことは信用によつて行なわれる。信用によつて、ただこの均等化が可能にされ容易にされるだけではなく、資本の一部分が——貨幣資本の形態で——実際に、この階級全体によつて操作される共同の材料として現われる。これは信用の一つの意義である。もう一つの意義は、資本が蓄積過程で経なければならぬ諸変態を短縮しようとする不断の試み、すなわち、流通期間や資本の貨幣への転化等々を先取りし、そして資本自身の被制限性にこうして対抗しようとする不断の試みである。最後に蓄積する⁽²⁷⁾という機能は、それが資本の転化ではなくて資本の形態での剰余価値の供給であるかぎり、こうして一方では一つの特殊な階級に負われ、他方では社会のすべての蓄積がこの意味では資本の蓄積となつて、産業資本家たちに用立てられるのである。このような、社会の無数の点で個々別々に行なわれる操作は、集積されて大きないくつかの貯水池に集められる。貨幣は、それが変態中の商品の凝固として遊休しているかぎりでは、こうして資本に転化させられるのである。⁽²⁷⁾」

マルクスはここに引用した一文を、「利子生み資本は、資本主義的生産に特有かつ相応な形態を、信用において受けとる。信用は、資本主義的生産様式そのものによつて作りだされた形態である。」と書くことによつて始めている。信用を利子生み資本の資本主義的形態だとすることによつて、さきの引用文中にある信用の三つの「意義」**Bedeutung** を統一的にとらえる視座を明示している。この点でも、『要綱』との間に大きな差異があるとしなければならない。そのうえでこれら三つの「意義」についてみれば、ここでのマルクスの論理が、利潤率を均等化させる作用として信用は、階級全体の資本を必然的に作出しなければならないことをまず示唆し、そのうえで、その過程全体が、「貨幣」の蓄積過程として、いいかえれば **monied capital** の蓄積過程として展開するこ

注(26) a. a. O., S. 1463, ⑦471ページ。

(27) a. a. O., S. 1515, ⑦503~4ページ。

とを確認している。それに対して、第2の「意義」としてのべられていることは、これらが、貨幣の形式上の還流ないし再生産的還流いずれかにかかわるものではあれ、信用が「貨幣」とかかわる側面を有することを示し、ここで全体として措定されている資本との対抗を示そうとしたものと考えてよいのではなかろうか。これは『要綱』における節約論とも、古典学派のそれともことになって、資本との歴然たる区別のうえに措定される貨幣の問題であったと考えてよいであろう。

さらに、この信用の第2の「意義」に関連して注意すべきことは、手稿「収入と諸源泉」中に、資本の流通過程にかんするマルクスの素描が見られることである。この手稿は、完成された資本との関連で資本の諸形態にかんするトポグラフィックな叙述を含み、そこではすでに流通過程からみた資本の諸形態（生産的資本、貨幣資本、商品資本）についての言及がなされている。これを受けてマルクスは、利子の源泉としての剰余価値の実現すなわち $G'(G+ΔG)$ としての還流の問題の一環として流通過程での資本の諸姿態の転回を問題にし、これを貨幣資本の側からみて $G-W……G'$ として、再生産過程としてとらえる⁽²⁸⁾。しかるにこの過程は、生産と流通との連続性として総過程的にとらえられねばならず、そこでは、Pで始まる過程も W'で始まる過程も相互に絡み合いつつ存在するものとして、事実上、資本の循環の三形式を示すことにもなっている。何故このようなことをここで説く必要があったのか。それはおそらく利子生み資本においては、すなわち「完成された資本では、これは（資本としての関係の消失）流通過程と生産過程との統一の全体として現われ、再生産過程の表現として——一定の時間、一定の流通期間に一定の利潤（剰余価値）を生産する一定の価値額として——現われるのであるが……」⁽²⁹⁾といわれることと関連している。すなわち、利子生み資本がもつ総体性と、いかえればここでの「貨幣」のもつ総体性と、再生産過程の諸局面における貨幣との差異と関連とをあきらかにするためであったと言ってよいであろう。すなわち第2の「意義」の措定は、資本主義的信用が物象的關係として展開されながら特有の構造、一種の重層構造をなしていることを示唆せんがためであったと言ってよいであろう。

〔6〕以上、われわれは、マルクスが、1850年代初頭から「1861—63年草稿」にいたる時期に、信用をいかに内容的に展開してきたかを概略的に見てきた。すでに、いわゆるプラン問題の論議の中心をなした「資本一般」が、利子生み資本（貸付可能貨幣資本）の措定そのものによっても保持しがたいものであったことがあきらかとなったが、そのうえ以下の諸点をまとめとして指摘しておきたい。

(1) この時期の信用論の展開の中心ともなり、信用論の方法をも規定した「信用の基本規定」は、資本の流通過程における貨幣の検討の深化によって相対化されるにいたった。

注 (28) a. a. O., S. 1479, ⑦ 449ページ。

(29) a. a. O., S. 1482, ⑦ 454ページ。

- (2) 資本の流通過程にかんするマルクスの理論的深化は、貨幣資本概念の種差を明確にすることを可能とし、貨幣資本と「monied capital」とを区別することを可能とした。ただし、これは貨幣と monied capital との区別とは本質的に異なる。
- (3) 利子生み資本論は、諸資本の競争との関連において、貨幣市場の要因として展開されえた。これは「諸資本の競争」から「信用としての資本へのみごとな移行」⁽³⁰⁾への不可欠の媒介項とされたと解することができる。

2. 『資本論』第3部第5篇

〔1〕現行『資本論』第3部は、フリードリヒ・エンゲルスの手によって、1894年に刊行された。当該部のエンゲルスによる編集作業が、容易ならざるものであったこととは、エンゲルス自身が、序言のなかであきらかにしている。かれは、「第3部はたぶん技術上の困難しかないだろうと思っていた。もちろんいくつかの非常に重要な篇は別としてのことだったが。じっさい、そのとおりだった。しかし、まさにこれらの諸篇、つまり全体のなかの最も重要な諸篇がこんなにも多くの困難を私に与えようとは、当時思ってもいなかったし、また、この第3部の完成をこんなにも遅らせることになったそのほかのいろいろな障害についても、当時は少しも予期していなかったのである。」⁽³¹⁾とのべている。「いくつかの非常に重要な諸篇」というのは、おそらく現行第1篇や第5篇を指すものであろう。

現行第3部の草稿(Manuskript)についてエンゲルスはつぎのようにのべている。

「この編集の仕事は第2部のそれと根本的に違った。第3部のためには、たった一つの、しかも欠けたところのまったく多い最初の草案があっただけだった。」⁽³²⁾

この草案は、——現行第5篇に明瞭にうかがえるように——叙述のうえでも整理されたものとは言えず、一面まさに、素材の集合とスケッチの域を出ないものであった。これが、現在第3部の主要草稿とか、「第1稿」と呼ばれているものである。⁽³³⁾第2部との相違というのは、第2部については、第1稿から第8稿まで、8種類の草稿があることを意味している。⁽³⁴⁾これについては、ここで詳

注 (30) MEGA² II/3.3 S. 818, ⑥298ページ。

(31) Fi Ençels Vorcoort zur 3. Band des Marx' Kapital in: Marx-Engels-Werke Bd. 25, S. 7. 邦訳, 大月書店版5ページ, 以下『資本論』第3部を含めて, MEW, Bd. 25, S. 7 とのみ略記する。

(32) a. a. O., S. 10—11.

(33) 佐藤金三郎氏は、この草稿を「主要草稿」として(同氏「『資本論』第3部原稿について(一)〜(三)」「思想」562, 564, (1971年)580 (1972年)。また大谷禎之介氏は近著「『資本論』第3部第1稿について——オリジナル調査にもとづいて——」「経済志林」50巻2号, 1982年では「第1稿」としている。

(34) 第2部の諸草稿については, A. Tschepurenko, Zur Datierung von Marx' Arbeit am III., IV und II. Manuskript des zweiten Buches des "Kapitals". in: Beiträge zur Marx-Engels-Forschung 11. Berlin

『資本論』第3部第5篇

しく立ち入ることをしないが、第2部の第1稿と、第3部の「最初の草案」と言われるものとの間には、相互に関連性があり、この点については、のちに見るように看過されてはならない。

第3部のための主要草稿（「第1稿」）の執筆時期は1865年年央だと考えてよいであろうが、この執筆時期と、第2部第1稿の執筆時期とは重なっているようだ。ヴィゴツキー他の調査では、⁽³⁵⁾第2部第1稿の執筆は、第3部主要草稿の執筆の途中で、中断する形でなされている。このことからしても、第2部と第3部とは、きわめて近接したところで構想され、執筆されたものと言ってよいであろう。この点については、とりわけ、剰余価値の利潤への転化を扱う第1篇について、とくに重要な問題を提起していると言ってよいであろう。⁽³⁶⁾

第3部主要草稿のなかの現行第5篇に相当する草稿は、編集に当たったエンゲルスをして、最も難渋させたものであった。この草稿の性格については、エンゲルスのすでに引用した序文や、わが国における佐藤金三郎、大谷禎之介両氏の詳細な調査にゆずることとして、ここでは、これ以上言及しない。ただ、のちの展開との関連で一言するならば、マルクスが、一部プランを変更して、当初第4章として記述することを意図していた商業資本と利子生み資本とを、この草稿においては、第4章と第5章の二つに分割したことで、後者の構成が、全6章からなるものとされていること（エンゲルスの編集による現行版では全36章からなる）である。これらの変更のうち、前者はマルクス自身によるものであり、われわれの課題にとって、とりわけ重要な意味を有していると考えねばならない。

第3部主要草稿に先立って執筆された1861～63年草稿のノートXV以後XVIIIにかけて、マルクスは、この点の解明に示唆的ないくつかの言及をおこなっている。そしてこれらは、終局的に——少なくとも1861—63年草稿段階においては、ノートXVIIIの手稿「再生産過程における貨幣の還流運動」に帰着するものであると考えてよいであろう。では、この内容は、いったいいかなるものであろうか。

「還流運動」は、すでにそれに先行するノートにおける、貨幣取扱資本や、いわゆる貸付可能な貨幣資本にたいする言及をうけて、それらの諸形態を、貨幣の形態諸規定と、いわゆる再生産過程における資本の一形態としての貨幣資本の規定とのいずれからも区別することであった、とあってよいであろう。それは、この手稿が、手稿「複利」[Zinseszins]によって中断されていることによっても、また、貨幣資本の運動を、流通の二つの部面すなわち商業流通と一般的流通との相互規定的な側面において把握することを意図し、一般的流通から切り離して、貨幣流通や、貨幣資本の独自の流通運動をとらえようとするものではないとあってよいであろう。したがって、このような帰

1982、大谷禎之介「『蓄積と拡大再生産』(『資本論』第2部第21章)の草稿について(上、下)——『資本論』第2部第8稿から——」『経済志林』49巻1号、2号1981年等を参照。

注(35) B. ヴィゴツキー他「1863—1867年におけるマルクスの『資本論』執筆の時期区分について」『世界経済と国際関係』55号、1982年、とくに205ページ以下。

(36) この点については、前掲大村、佐藤、大谷各氏の論文を参照。

結からして、ここでは「信用」の問題も同様初発から一応枠外の事態とされていたといつてよいであろう。すでにノートXVIやノートXVIIにおいて、商業資本を問題にするに当って、そこでは、貨幣流通にかかわる商業資本の技術的操作だけではなく、蓄蔵貨幣の規定と関連させることによって利子生み資本の規定や信用を想定して論議していた。マルクスは、このような方向を、再生産過程(社会的総資本の再生産と流通)における貨幣、という問題に純化したのである。そして、この方向は、1865年の『資本論』第2部第1稿において、改めて信用の必然性の解明の問題として措定し直されているのである。ここにはすでに前節において指摘したマルクスにおける信用論展開の二方向の単に時系列的な連関のみならず、両方向の論理的・構造的連関にかんしても、きわめて示唆に富む発展が看取されるといわねばならないであろう。

[2] 現行『資本論』第3部第5篇は、利子生み資本と信用制度の解明が、前者を基礎カテゴリーとして措定しつなされているというのが通説である。そしてまた、従来からこの二つの部分の連関をめぐって多くの見解が示されていることも周知である⁽³⁷⁾。このような第5篇の構成は、基本的にはマルクスの主要草稿のそれを引き継ぐものであるといつてよいだろう。今日までの調査では、草稿の当該章は、6章からなり、1～4章が現行版の第21～24章に、5章が第25章から35章までの諸章に、そして6章が第36章に相当することが明らかにされている。したがって、マルクス自身の意図した章区分の論理的関係について一定の理解に達するならば、エンゲルス編集による問題提起に、ある程度の、いな、基本的と言いうる解答を用意することができるであろう。しかるに、これとは逆の方法で当該問題に接近する場合には、これもきわめて基本的な困難に直面する。それは、エンゲルスの現行版編集において区分された第25章以降の諸章が、マルクスの草稿の「(5)信用・擬制資本」と根本的に異なるからなのである。現行第25章以降を、マルクスは一括、「信用・擬制資本」としたが、この意味が明確にはならないからである。この論点は、ひとまず措いて、まず、利子生み資本をめぐる問題に関連するいくつかのことを考察してゆきたい。

さきのべたように、当初第4章として一括されていた現行版第4篇および第5篇が、二分されるについては、まず、『資本論』第2部で扱われる貨幣の独自の独自な問題にかかわるものであるといつてよいであろうが、他面、競争と利潤率の均等化の問題が商業資本をも統括するというように「競争」論そのものの展開にも一斑の原因があったと考えてよいであろう。しかし、他方においては、貨幣取扱資本が、利子生み資本の運動部面に深いかかわりを有すること、すなわち貨幣蓄蔵の独自

注(37) この論点の意義・推移については、信用理論研究会編『信用論研究入門』1982年所収の拙稿を参照されたい。

(38) 以下の論述は、前掲の佐藤、大谷両氏の既発表論文に主として依拠するが、筆者自身が、1972年秋アムステルダムの「社会史国際研究所」において Dr. Harstick の指導のもとにおこなった調査に一部依っている。また、1983年5月9日の信用理論研究会大会(専修大学)における大谷氏の報告およびそのさい氏が配布した資料からも、少なからざる教示を得たことを記し、感謝する。なお、氏はその資料の利用について好意的配慮を示された。併せて感謝する次第である。

な機能と信用関係の形成については、依然として論点を残したままで分割されたのであった。すなわち、競争論的な次元で流通過程をより具体的に把握するなかで貨幣を再規定するという範囲に商業資本論の叙述を限定することができなかった。だから二つの章への分割は、同時に二つの章の論理的関連をも示すこととなっていたと言ってよいように思うのである。この点についてマルクスは草稿においてつぎのようにのべている。

「貸借の機能や信用取引が貨幣取扱業のそのほかの機能と結びついたとき、貨幣取扱業は完全に発展しているわけである〔といっても、これはすでに貨幣取扱業の発端からあったことではあるが〕⁽³⁹⁾。しかし、これについてはあとではじめて〔論じる〕。」

すなわちここに明確にされているように、利子生み資本の範疇的な措定は、一面からみれば、貨幣取扱資本の十全な発展を表わすということである。しかし、この側面は、現行版第19章の枠組みとしての流通過程論や競争概念の導入によっては到底展開しうるものではなかった。まさに信用取引それ自体が対象となる新たな部面が必要であったのである。

こうした観点から草稿の第5章の(1)から(4)の前半の4節(現行21~24章)をみると、この部分は、大きく二分される。まず、現行版第21章、22章に相当する部分で、ここでは、貨幣取扱資本が、 $G-W-G'$ の流通形態のなかでのGの取扱としてとらえられたのに対して、それに重なる $G\cdots G'$ としての「貨幣資本」の運動を提示する側面、および利潤率や利潤の概念と一定の連関を持つ利子率と利子の概念を措定することによって、現行版第4篇の競争論的諸展開に接続する部分。第2の部分、第23章、24章を中心とした、貸付可能貨幣資本としての利子生み資本の一般的性格と、それによるこの「貨幣資本」の運動部面の独自の競争関係を、階級共同の資本たる概念の再措定によって展開する部分。前者は貨幣取扱資本の十全性獲得への論理的展開であり、後者は、十全な貨幣取扱資本の独自の展開部面——「流通」部面——の措定であり、「信用」の展開と直接繋がる部分である。

従来、いわゆる利子生み資本論は、最高度の資本物神の展開にいたる、利子生み資本の独自の運動(流通)様式を、その商品性格(商品擬制)と、貸付資本家の措定とによって説くものとされてきていた。このような理解は、物象化された資本の極限としての利子生み資本を浮き彫りにすることにおいて意味のあるものではあったが、反面、何故「信用」が展開されねばならないかを積極的に論定し難い難点を併せ持っていた。これに対して、われわれは、利子生み資本の一般的規定が、資本がその個別性格を喪失して、社会的なものに(一律の「価格」をもつものに)、また階級共同の資本ないし大量堆積としての資本に転化することを前提とし、また、この転化を、システムの保証するものの存在を前提とするものであることをあきらかにしなければならぬと考えるのである。

注(39) 大谷禎之介「貨幣取扱資本」(『資本論』第3部第19章)の草稿について——『資本論』第3部第1稿から——
『経済志林』50巻3・4号、1983年、280ページ、MEW. Bd. 25. S. 332.

すなわち、現実資本が個別資本として再生産される蓄積機構に対比される、貨幣資本の独自の蓄積機構の問題がここには伏在していると言ってよいのである。その際、それは資本関係に対しては、最高度の資本物神として、人格的依存とは程遠い関係を形成するが、他方、資本そのものが、その物的(dinglich)な性格を独自の論理によって貫徹させるのであって、ここに「擬制資本(Fiktives Kapital)」の語が第5節(現行版第25章)に冠せられる根拠があったのである。

[3] 現行版第25章の表題「信用と擬制資本」は、主要草稿では第5章の第5節の表題であり、したがって現行版第25章から第35章までに及ぶ論述をカバーする部分の表題である。このことからして、われわれは現行版の信用論の叙述の大部分が、「信用・擬制資本」なる指示のもとに再検討されなければならない状況にあるとしてよいであろう。

主要草稿第5章の第5節は、現行版第27章を境に二分される。以下まず、このような解釈の根拠を示すこととしたい。

現行版第27章「資本制生産における信用の役割」(草稿には章区分も表題もない)は、周知のとおり、信用による利潤率の均等化の媒介、貨幣の節約、株式会社の形成(現行版では、「IV」としてさらに株式資本にかんする項が特別に区分されているが、これは主要草稿にないし、また現行版の論述に即しても不要と考える)を論じたあとつぎのように言う。

「これまでわれわれは、信用制度の発展——そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な止揚——をおもに産業資本に関連させて考察してきた。以下の諸章では、信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する。すなわち信用が利子生み資本に及ぼす影響を、またそのさい信用がとる形態をも考察する。⁽⁴¹⁾」

ここに見られるように、マルクスは、信用制度を、産業資本との関連で問う側面と、利子生み資本との関連で、利子生み資本の信用制度として問題にする側面とに二分している。これをうけて、草稿では、現行第28章から、(I)、(II)、(III)のごとくに項区分が第30章までなされている。利子生み資本が元来信用制度の産物であるとすれば、ここでの問題は、信用制度をそれ自体として考察するということであろう。何故、信用制度それ自体が問われるのであろうか。1861—63年草稿では、信用制度を、産業資本の一分岐とさえ規定していたのである。このような展開への方向性は、すでに第27章の論述そのものが与えていたのである。

第27章は、信用制度にかんする一般的覚え書として書かれるのであるが、この論述の進め方は、1861—63年草稿において与えられていた。そこでは「役割」としてではなく「意義」としてであった。その意義は、利潤率均等化の媒介、節約、蓄積の三項目に要約できる。とくに最後の項目は、

注(40) 大谷氏の調査(前掲)による。

(41) MEW, Bd. 25, S. 457.

貨幣資本の蓄積であった。これに対して、現行版では、最後の蓄積が「株式会社の形成」に代えられている。しかし、これは、あえて項目を変更したということであろうか。否である。マルクスは、株式会社の形成にたいする信用制度の役割を、ここではまさに貨幣資本の蓄積と同意味にとらえた。しかも、1861—63年草稿から一步踏み込んで、有価証券の媒介による貨幣資本蓄積をも念頭に置いていた。すでに現行版第19章でマルクスはつぎのようにのべていた。

「国際的支払の決済が為替取引等々としていっそう発展する次第も、また有価証券業務にかんするいっさいのことも、つまりここでわれわれに関係のない信用制度の特殊的諸形態は、ここではまったく考慮しないことにする。⁽⁴²⁾」

この信用制度の特殊的形態こそ、貨幣資本の蓄積の問題とされていたものである。このことは、第19章の前述したような性格からして、利子生み資本範疇が、この信用の特殊的形態をも包括するものであることを意味するであろう。「擬制資本」なる用語法もこのような事態を指示するためであったといつてよいであろう。だから、利子生み資本の信用制度を取り扱う、第5節(草稿)後半の問題は、利子生み資本自体の概念の拡張する一般的傾向のなかで、元来の貨幣資本の蓄積の論理がいかに貫徹するかをあきらかにしようとしたものであると理解することができるであろう。

これに対して前半部分、すなわちマルクスが産業資本との関連で信用制度を論じたとしている部分は、いかなる内容を指示するのであろうか。この点については、第27章の指摘との関連で、やはり二つの方向を確認しておかねばならない。それは「役割」規定のⅠとⅡとに関連するものである。しかし、ここでは、『資本論』第2部の第1稿がほぼ同時期にかかれたにもかかわらず、利潤率の均等化の媒介をⅠとし、貨幣節約(流通空費の節減)をⅡとしていることに注意しておく必要がある。この順序は1861—63年草稿においてすでに提示されていたものであり、それが主要草稿段階にまで保持されたのである。

利潤率の均等化は、商業資本の流通機能を介して、より十全な形で達成されることは、すでに第4篇があきらかにしているところであるが、そのさい、資本は常に貨幣形態をとるというだけではない。それは、貨幣取引としてのG—G'形態を契機として独自の流通機構を、従来の機構に重ねることによってはじめてなしうるものであった。このような意味からして、信用の基本的機能は、まず利潤率の均等化への個別資本的対応に対立する、社会的・大量的形態での貨幣資本の対置をもって基本的に措定される。産業資本の信用制度といえども、利子生み資本の資本関係を内包しつつ展開することがまず示されるのである。これに対して、Ⅱに明らかにされている貨幣節約は、信用が商品流通に基礎を置く貨幣の機能とのかかわりにおいても展開されること、すなわち債権・債務関係の措定がなされうることと、同時に、信用制度が貨幣制度を基礎として展開し、信用手段が「貨幣」性格をもつことを、一般的に示したにすぎないのである。さらにいえば、後の引用文に見られ

注(42) 大谷, 前掲論文, 285ページ。

るような、信用諸手段の分析と有価証券の分析とを統一的に把握する視点を明示することによって、monied capital との差別と同一性を示そうとしたのである。いわゆる信用制度の自然発生的基礎もかかる意味においてとらえられるのであって、それが直ちに商業信用に発展することを意味してはいないのである。

周知のとおり、マルクスは、現行版第25章冒頭において、以下のような留保文言を与えている。

「信用制度やそれが自分のためにつくりだす諸用具（信用貨幣など）の詳しい分析は、われわれの計画の範囲にははまらない。ここでは、ただ、資本主義的生産様式一般の特徴づけのために必要なわずかばかりの点をはっきりとさせておくだけでよい。そのさい、われわれはただ商業信用（と銀行信用）を取り扱うだけにする。この信用の発展と公信用の発展との関係は考察しないで⁽⁴³⁾おく。」（佐藤、大谷、筆者らの調査によると、カッコ内はエンゲルスの挿入による。）

この一文は、『資本論』の信用論全体を特徴づけ、性格規定を与えるものとして従来、きわめて重要視されてきた。ここから、信用論は、商業信用、銀行信用を扱うということが定説とされるに至った。しかし、「信用・擬制資本」という表題を与えながら、なぜマルクスは、商業信用（das Kommerzielle Kredit）のみを扱うとしたのであろうか。また、この引用文の冒頭の信用諸手段の分析とは、いったいいかなる性格のものであろうか。抑々このような明確な指示が、第25章ないし、草稿(5)全体の展開といかなる関連にあったのであろうか。マルクスは、信用論で商業信用および銀行信用を分析および叙述の中心的課題としたのであろうか。ここにあるのは、信用の再生産過程による規制関係と貨幣資本（monied capital）の信用制度との関連を一般的に論述することだったのであるのか。これらについては節を改めて検討する。（未完）

（経済学部教授）

注 (43) MEW, Bd. 25, S. 413.